「続・倭詩」
いよいよ発刊間近！

12月下旬、発売予定。

「倭詩」第二集、発刊によせて

編集部　島田　浩

まほろばに入社した22年前、社長の自宅で一週間ほど社員研修をして頂いたことがある。その際、社長から「岡潔先生を知っているかい？その先生が僕の心の師なんだ」と聞かされた。当時、まったくの無知であった私は、岡先生のことなど知りようもなかったが、その後、15年ほど経って東北の震災前後の頃だろうか、著名な経営コンサルタントであり、数多くの著書を持つ故・船井幸雄氏をはじめ、にわかに岡先生のことを取り上げる方が多くなった。ようやく時代が追いついてきたのだ。

いったい何が、この時代にマッチしたのだろうか。それは、本書のまえがきにもあるように「情緒」という一言で語られているものの実体である。それが何か、語る言葉を知らないが、おそらく言葉にできない、言葉以前の何かであろう。

時代に先駆けたその精神は、本書の随所で光を放つ。校正のため何度か読み返してみると、4年～2年半前の連載時には素通りしてしまった言葉の数々が、まさに、今、この時を待っていたかのように、ストンと腹に落ちてくる。

それでも、まだまだ、分からないことの方が多く、まるで峻険な山岳を登ろうと思い立ったものの、遠くの頂を麓から眺めるだけで終わってしまうのではないか…という諦めにも似た感覚に陥ることもある。

しかし、山は眺めるのも良いが、やはり苦労して登り、その頂上に立って初めて見えてくる光景というものがあるものだろう。

けっして軽い気分で読めるような軟弱なエッセイなどではなく、浅学な私にとってはエベレストに登るような読書体験であることは言うに及ばない。実際、死に至ることはないだろうが、遭難する可能性はないとは言えない。

まずい。だんだんこの本を勧めているのかどうか、わからなくなってきた。

本書に挑戦しようとする人は、そう多くはないかもしれない。それでもやはり、ここを通り抜けなければ、この先には進めない…という、何かがあるのだ。

「情緒」という言葉でくくられるその領域は、様々な彩を放つ本書の話題の端々に垣間見えながら、やがてじんわりと魂の深くに迫ってくる。

そこに、この本の真骨頂があるのではないかと想像するのは、まほろばの上司（社長）という身内であり、師でもある宮下への、私の思い入れ故であろうか。

いずれにしろ、大手出版社で永年経歴を重ねられたIDP出版の和泉社長でさえ、「こんな本は他にはない」と言わしめた本書である。もう二度とお目にかかることはない確率が高いでしょう。いずれ遠からず、プレミアがつくかもしれません。宮下ワールド全開の本書を、ぜひこの機会にお手元に置かれてみてはいかがでしょうか。

また、アーティストでありながら食や農業、自然なライフスタイルへの関心が深い大貫妙子さんに頂いた「推薦の言葉」をはじめ、メジャーな舞台で大活躍される社長の甥のホセ・フランキーさんによる表紙画、連載時にすでに数度も赤を入れている原稿に、さらにこんなにも校正をするものか…と思うほど何度も何度も赤を入れて頂いた国際自然医学会の山司さん、㈱新生の三輪社長。この方々なくしてこの『続・倭詩』はなかったでしょう。

今回も前作同様、お茶の水クリニックの森下敬一先生が主幹される『森下自然医学』誌に連載された2012年4月から2014年5月までの記事がベースになっています。連載終了後、『まほろばだより』に掲載された三篇を入れ、2014年夏頃からはじめた出版社との編集作業は、間に30周年の記念行事を挟んだこともあり、遅れに遅れ、とうとう2016年の年末の発刊になってしまいました。

今回は『自然医学』紙面で掲載された森下先生・船瀬俊介氏との鼎談「水とは医学」も、宮下のアイディアで裏表紙から読めるように横書きで掲載されています。さらに私の拙い写真もたくさん本文に使って頂いた上、過分な紹介まで頂きました。恐縮この上ありません。他にもまだまだ、まだまだ、語るところの多い本書です。

かように多くの労力を割いて作られた渾身の一冊。まずはお手に取って、そのエネルギーを感じてみて下さい。もしかしたら、それだけでも十分に価値があるかもしれません。

すぐ横でこの本の出来上がる過程をつぶさに見ていた者の一人として、今回一文を寄せさせて頂きました。まほろばのこれまでと同じく、時代に流されず、時代を先駆ける一冊であると自負しています。どうか皆様、年末の発刊を楽しみにお待ち下さいませ。

まほろばだより
No.4409 16-185 12/2

ご予約特典

年内20%OFFでご奉仕。 ご希望の方には、著者のサインもさせて頂きます。

『続・倭詩』宮下周平著
IDP出版刊
定価2,800円＋税